肖

肖は、肉体の意味の月と小(ショウ)との会意形声字です。親と子とは、肉体の大きさが違うだけで、顔形から話し方、癖までよく似ているものです。子は“肉体が小さい”だけで、あとは“似ている”という意味で、“似る”という意味を表わした字です。特に、子が親に似るという場合の“にる”に用います。だから「不肖」というのは、“親に似ない愚かな者”という意味の字です。肖像。音は小(ショウ)です。

部首としては、ほとんど“小さい”の意味に使われます。

霄は、“似る”意味の肖と雨との会意形声字です。“雨に似たもの”雨まじりの雪、つまり、“みぞれ”のことです。音は肖(ショウ)です。

鞘は、“似る”意味の肖と革（なめし皮）との会意形声字です。“刀のさや”のことですが、刀身をぴったりとおさめるために、刀身によく似せて作るので肖と言うのです。古くはなめし皮で作りました。音は肖(ショウ)です。

消は、“小さい”意味の肖と水との会意形声字です。“水が少なくなる”という意味の字です。転じて、すべて物の減少する意味に使われ、今では“きえる”意味に多く使われます。消滅、消却、消化。「消息」は、元来、消えることと生ずることの意味ですが、生滅、増減は物の変化することですから“変化”→“様子”の意味に使われます。「友人の消息を気づかう」。

硝は、“水につけるととけて消える石”という意味で名付けられた「硝石」のことです。初め、「消石」でしたが、これを一字につづめて「硝」としたものです。音は肖(ショウ)です。

梢は、“木の小さい部分”という意味で、“木の先端”“こずえ”（木末）を表わした字です。「本質的」でないことを「末梢的」と言います。音は肖(ショウ)です。

逍は、“小道を歩く”という意味の字です。「逍遥」という熟語で使われますが、遥は、ここでは、遠方まで行くという意味ではなく、近い範囲を行ったり来たりして長い距離を歩くという意味を表わしています。

宵は、“家の中の人が皆似て見える”という意味の字で、“暗くなった”ことを表わしています。訓は“よい”です。「夜」や「夕」が自然現象としての“よる”を表わしているのに対して、宵は、人間生活の感情が込められた“よる”のようです。熟語も「宵寝」「徹宵」など、そういうものに限られています。